

三つ子の魂、百まで

(二財) 北里環境科学センター

名誉顧問 伊藤俊洋

2025年は、昭和100年、量子力学誕生100年、戦後80年という歴史的にも重要な節目の年である。

私は、1941年12月1日の生まれで、例の真珠湾開戦の1週間前である。3歳8ヶ月で終戦を迎え、戦争のことは全く記憶にないが、戦後の混乱期を無我夢中で生き延びたという記憶は鮮明に残っている。

日本には、平安時代に書かれた源氏物語に由来する、「三つ子の魂、百まで」という諺がある。

「三つ子」とは三歳を示すが、正確な年齢というより幼子を意味すると言われている。私の性格や人間性はどのように形成されたのだろうか。

ヒトの子は、十月十日（実際は280日弱）母親の体内で育まれ、臨月を迎えると、母親の体内からオギャアと生まれ出る。最初は母乳や育児用ミルクで育ち、次第に離乳食に変わり、およそ12ヶ月で二足歩行となり、言葉を話すようになる。この時期に、すでに相手の心を読んでも、上手に立ち回ることを覚える。

2歳、3歳と歳を重ねるに連れて、親、兄弟、周辺の人たちと意思の疎通を重ねながら、愛情、怨念、誇り、挫折、友好、支配欲、優越感、劣等感、恥辱心など、様々なストレスの中で、挫折と復活を繰り返しながら人間としての感性を磨いてゆく。

小学校に入学する頃には、憧れや恋心なども芽生える。そして、思春期という人生最大の難関を乗り越えて、一人前の大人に成長する。

生まれてから3歳頃までに経験したことは記憶には残らないが、その人の深層心理には岩盤のように蓄積して、性格や人間性に強く影響す

る。この、意識としての記憶に残らないということが大変重要なことだと私は思う。記憶があれば、自分の性格が形成される過程が見えるので、性格を制御することも出来るが、記憶になければ制御しようもない。このことが、「三つ子の魂、百まで」の諺を支える最も強力な証ではないかと思っている。

親はもとより、周辺の大人は幼児期の子供に溢れるような愛情を注ぎ込みながら、できるだけ社会性を身につけさせたい。そのためには敢えて集団生活など、社会の荒波に触れさせることも大切だと思う。この時期の手抜きは絶対に許されない。手抜き・虐待で育てられた子供が、社会の負の連鎖に落ち込んでゆく事例が散見される。

逆に、この時期に、「蝶よ、花よ」と何のストレスも与えずに過保護な環境に置くと、人の心の機微を理解することができない人間になってしまう可能性がある。私は、乳幼児教育は近代社会の最重要な課題であると思う。

私が幼少期を過ごした戦中から戦後の混乱期は、国が存亡の危機にあり、親や社会が乳幼児に対し特段の気を配るゆとりはなかった。この時代から団塊の世代の乳幼児たちは、放りっぱなしにされながら、大人たちが懸命に働いている様子をじつくりと観察し、自分達の生き伸びる力を自然と身につけたのではないかと思う。

これらの世代の頑張りによって、戦後の復興は果たされ、高度経済成長からバブル経済を経て、さらに格差社会へ移行するに従い、社会の生活形態は複雑かつ多様化し、乳幼児の育てられ方も多様化してきている。

近年の子供の虐待や、若年層の衝動的な殺人事件の多発は、日本に限ったことではなく、多くの先進国でも発生しており、特筆されるべき社会現象である。

100年前に誕生した量子力学は、生命科学の世界に革命的な進化をもたらしている。生命の誕生に対しても、人の人為的な欲望が入り込む余地さえ生み出している。

情報伝達技術の革命により、世界はインターネットを介して一つになり、社会のあらゆる分野に生成AIが浸透する時代になった。教育の世界にもAIロボットが介入し始めていて、これから本格化するAI時代の乳幼児教育に対しては、社会を挙げて細心の注意を払わなければならないと思う。